

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

## 山岳スキー競技日本選手権大会にスタッフとして参加して(抄)

広島県高体連登山専門部 西部伸也先生寄稿

2015年4月4日～5日、長野県小谷村柵池で開催された第10回山岳スキー競技日本選手権大会に役員スタッフとして参加させてもらった。役員スタッフは、日山協役員の他には、地元の長野県ならびに北信越地区の方々が務めるのだが、遠方の私に加えてもらったのは、前年の11月に広島でアジア山岳連盟創立20周年記念行事が開催された折、それに参加していた長野県・大西浩さん（長野県山協理事長・全国高体連登山専門部副部長）とお話する中で山岳スキー競技会のことが話題になり、大西さんから「旅費までは出せないが、宿泊は面倒見れるから、役員スタッフとして来ないか」と誘われたからである。以前から日山協の月報で山岳スキー競技会のことは知っており、山スキー愛好者の一人として、山岳スキー競技とは一体どんなものなのだろうと大いに興味を持っていたので、大西さんの誘いを喜んでお受けした。

2月中旬、スタッフ募集の正式依頼のメールが届いた。すぐに私は「参加」の返事を送り、回答書式には「配置希望箇所」の項目があったので、「山中での選手の様子を観察したいため、山中旗門への配置を希望」と書き加えた。3月下旬、役員配置の詳細が届き、私は⑤班のA旗門担当であることを知った。A旗門は今回の競技コース中の最高地点である西鶴のピーク（1930m）に設置されることになっていた。競技会スタッフではあるものの、自分も山スキーで行動できるのを嬉しく思った。

4日9時過ぎ、柵池観光協会前に到着。すぐに大西さんに出会い、観光協会入口にて日山協の山岳スキー競技担当であるSさんや長野県山協のKさんとも挨拶を交わす。11時の役員集合まで時間があつたので、競技会場の中心となる柵の森まで上がってみることにした。標高1600m前後となるこのあたり、ガスで視界はきかず、しかも小雨模様であった。柵池ハンノ木コースの長いゲレンデを滑降して、11時前に観光協会に帰着し、役員打ち合わせに臨む。

私が属するA旗門グループの他のメンバーは、リーダーのKさん（大町山の会）、Hさん（労山・富山県）、Mさん（MB(Mount Bully)・長野県）、Sさん（MB・富山県）で、この日の業務は、A旗門手前の誘導X（柵の森から柵池自然園に向かう林道途中の1770m地点）からAに向けての登りのトレースを2本しっかりつけることであった。すでに先行役員の方が20～30m間隔で登りルートを目印となる緑の旗を立てていて、トレースもついていたので、困難な作業ではなかった。（新雪が降ったりすると大変な作業になるのだろうが…。）ただ、我々の班のメンバーは皆さん割と若くて元気であった。60歳になった私は、年齢からすればまずまず体力はあると思っていたが、Kさん・Hさん・Mさんの3人からはしばらく遅れ、なんとか女性のSさんと一緒にA旗門に登ることができただけであった。時計を見ると、標高差150mを20分で登っていた。やはり並のスピードではなかった。私の通常のシール登高では、雪の条件が良くても、発汗をなるべく抑えるためもあり30分近くは時間をかけるところだ。

A旗門に着いた後は、降りルートの赤い旗を確認しながら滑降。途中、林道下りを経て、あとは長いゲレンデを3~4回ほど立ち止まるだけで、ほぼ一気にゴンドラ山麓駅まで滑降。これも、Sさんを含め、皆さんのスピードの速いこと速いこと！スキーが私のみテレマークだったこともあるのだろうが、なんとかあまり離されずに皆さんを追いかけていくのが精一杯だった。山麓駅に帰着したのが14時半前で、16時過ぎからの後着役員を含めての打ち合わせにはまだ時間があったために、私は車に戻って一休みすることにした。16時から開会式が始まるので、その少し前に会場に赴いて選手たちの様子など観察させてもらっていたところ、会場で販売されていた山岳スキー競技の用具に驚かされた。競技の世界の用具はこんなんだ！軽いこと軽いこと。最近流行りのTLTビンディングが軽量なのは知っていたが、ブーツも板も軽いのなんの！テレマークスキーがアルペンスキーに対して軽量さを自慢できる時代はとっくに終わったのだと感じた次第。

この驚きは、翌日の競技当日、A旗門でシールを剥がし滑走へと移る選手たちの様子を見て、また輪をかけられた。なんとほとんどの選手たちは、シールを剥がすに際して、スキーを履いたまま行うのである！道具もそれがうまくできるようになっている。板の先端に紐でひっかけているシールのトップを外し、あとは横方向に剥がすようにしてやれば、エンドを止めてはいないシールは簡単に外れる。シールの形状もバックカントリーで使うような幅広のものを板のサイドカーブに合わせているようなものではなく、細めでまっすぐな形状になっている。(道理で前日、大会コースの下見で、我々と同じくXからAへと登っていた選手が、シール登高で苦勞していたわけだ。)なお、テレマーク部門の選手たちの中には、板を後ろに蹴りあげてシールを外す選手もいたが、それも一つの見ものであった。さらに、登高モードから滑降モードへのビンディングの切り替えもかかとのステップインでできるようになっていた。

大会当日、2周してくる選手たちをチェックしながら、3時間少々小雨降るA旗門に立っているのはいくらか辛くもあったが、競技の様子への驚きと頑張る選手たちの姿が、その苦勞を和らげてくれた。全選手通過後は、私は登り目印の緑旗を回収しながら、さらにX地点からは、昨日はロープウェイで通過したためトレースしていなかったルートもたどり、本部の「カフェテリア梅の森」に無事帰着して、昼食券を受け取り、暖かい建物の中の幸せなひと時を過ごした。表彰式の様子も少し見物させてもらい、広島に帰るのが遅くなるとはいけないので、他の皆さんよりは少し早めに下山させてもらった。

来年、役員スタッフとしてまた参加したいと思うかどうか、今は何とも言えないが、今まで知らなかった世界の山岳スキー競技なるものに触れさせていただき、長野県山協・日山協の方々には大変感謝している。そして役員スタッフとしての大会参加を通じて、多くの方々と知り合いになれたことがとても嬉しかった。競技の運営は大変なことではあるが、それを通じていろいろな方と知り合いになれることは何にも代えがたい。このことはインターハイ登山大会しかり、広島で長年開催しているトレラン大会の比婆山スカイランしかりであろう。バックカントリーのハイシーズンとなる5月中下旬の開催であるため、失礼することの多かった比婆山スカイランであるが、今年は久しぶりに参加せねばならないという思いにさせられている。

(編者注) 西部さんのレポートを抄録で掲載させていただいた。今回の大会には大町北と大町の山岳部員(二人とも地元小谷村出身・中学まではスキー部)も参加し、ジュニアの部で韓国の2選手の間割りに割って入り、2位と3位になったのは、嬉しかった。(大西)